

福井県の繊維産業集積 (I)

平 井 東 幸

初めに

第 1 章 福井県の繊維産業の現状

第 2 章 福井県の繊維産業の歴史

…… (以上, 本号)

第 3 章 全国の繊維産地の現状と課題

第 4 章 福井県の繊維産業の特徴と問題点

第 5 章 福井県の元気企業

第 6 章 福井繊維業界の方向性

初めに

福井県はわが国有数の繊維産地であり、とくに合成繊維長繊維織物では日本一であるが、近年、アジアの繊維産業の著しい発展と経済のグローバル化の進展で、産地は著しい規模縮小を強いられており、企業の優勝劣敗と一部では新旧交代が起きている。

一方で、繊維産業は、歴史的に地域経済を支える基盤産業であるから、その盛衰が地域の経済社会に及ぼすインパクトも大きい。景気が長期低迷する地方においても地場産業の行方には大きな関心もたれている。

近年、広く産業集積の成立と発展、そしてその衰退が地域経済に及ぼす影響について、国の内外を問わず、また業種を問わず、国内製造業の在り方や製造業の海外移転を含めて関心が高まっている。一頃は「産業空洞化」という表現で注目を集めたが、さらに、特定業種の集積が地域の発展を促進する

というプラス面を評価する向きがある一方で、特定業種への集積は変革や革新を阻害するというマイナス面を指摘する向きもある。さらに、いわゆるIT革命の進展にともなう情報伝達の即時化やコスト低下などのインパクトをどう評価するかという新たな視点も出てきている。こうした種々の観点も踏まえて、福井県の繊維産地を事例として繊維の産業集積を調査したものである。

なお、本小論は、福井県立大学経済学部で1999年12月から2000年1月にかけて4日・8回にわたって行った「福井繊維産業論」の内容をベースにして、同県の繊維産地の現状、当面する問題点と課題、今後の発展の方向性などについて、とくに織物を中心に、さらに全国の繊維産業や岐阜県もその一部を構成している尾州毛織物産地とも対比しつつ、産業論という観点から、調べたものである。

この講義については、講義を寄付された社団法人福井人絹倶楽部をはじめ、福井県繊維協会の小山英之調査部長、福井県立大学の佐武弘章経済学部長、同じく金谷貞夫教授（現在は作新学院大学教授）に大変お世話になった。また、実地調査の一環としてセーレン(株)、サカイオーベックス(株)、小松精練(株)等の企業からもご高配、ご協力を頂いた。ここに記して謝辞としたい。

第1章 福井県の繊維産業の現状

繊維産業は素材の糸から中間製品の織物・ニット、そして最終製品までその製造工程が多段階であることに産業としての著しい特徴があるが、福井県にはそのほとんど全てが集積しており、これが同県繊維産業の大きな強みとなっている。

例えば、繊維産業の川上を構成する合繊糸製造では、敦賀市に東洋紡の工

場が、鯖江市にはカネボウの工場がある。紡績糸工場としては福井紡績（県も出資している）などがある。染色企業としては、合繊染色加工で世界的に著名なセーレンをはじめ、サカイオーベックスなどが大手の地元企業であり、また、カンボウプラスのような進出企業もある。このほか、ニット企業も数多く、スポーツ衣料や無塵服（製薬工場や半導体工場などで着用）などの縫製企業、産業用資材向けの繊維製品メーカーも県内に広く立地している。さらに、日華化学(株)をはじめ、繊維用薬品メーカーや繊維関連機械メーカーも少なくない。

しかし、最も規模が大きいのは織物工業である。企業数は近年減少しているものの広幅織物製造業だけで940程度はある。繊維産業が県で最大の産業であり、しかも冒頭にも触れたように織物生産量で日本一である。要するに、福井県はかつて「人絹王国」といわれた時代があったが、現在も依然としてわが国屈指の繊維産業県である。そこで、まず、日本の繊維産業における福井県の地位をみてみよう。

第1節 福井県繊維産業の全国的ポジション

初めに、わが国繊維産業における福井県の繊維業界のポジションについて概観し、次いで、県業界の特色について述べることで、わが国と県における繊維産業界の役割や重要性を考えてみたい。

福井県は合成繊維長繊維織物生産ではわが国首位である。これには古くからの絹織物産地としての蓄積を背景にして、戦後いち早くその地位を築いた経緯がある。

福井県の繊維工業¹⁾（紡績・織布・ニット・染色加工など）の出荷額は、1997年の工業統計によると（表1-1）、2961億円で、全国で第3位である。因みに、1位は愛知県で6700億円（同県は毛織物の世界最大級の産地。毛織物は単価が大変高い。また、綿織物の知多産地も著名）、次いで、第2位は大阪府の3791億円

表 1-1 わが国繊維工業における福井県の地位 (1997年)

府 県 名	事業所数	従業者数 (千人)	出 荷 額 (億円)
愛 知	2,283	36.3	6,700
大 阪	1,477	21.8	3,791
福 井	994	18.5	2,961
京 都	1,870	20.7	2,913
石 川	1,404	17.1	2,683
岐 阜	518	11.3	2,608
静 岡	520	8.6	1,474
和 歌 山	354	6.7	1,467
新 潟	397	9.3	1,207
富 山	151	5.5	870

(出所) 通産省『工業統計表』

(注) 従業員数4人以上のみ。なお、ランキングは出荷額による。

(綿織物やタオルの産地として大きい。かつて大阪はわが国最大の繊維ビジネスのセンターであった)。第3位が福井県、第4位は京都府で2913億円(絹織物産地の西陣・丹後がある)。なお、福井と京都は最近順位が入れ替わったが、これは後者の絹織物・和装が大きく後退しているのに対して、前者は合織長繊維織物中心に健闘しているためである。次いで、第5位が石川県(長繊維織物主体)、岐阜県(毛織物主体)である。以下、静岡県(綿織物や合織短繊維織物産地として古くから有名)、和歌山県(ニット産地が中心)、新潟県(絹織物・合織織物産地として有名)、そして富山県(長繊維織物とニット)の順である。

以上は、従業員数4名以上の事業所の統計であるため、実際の出荷額はこれを若干上回るとみてよい。ただし、3名以下の事業所の数は多いが、零細規模であるため個々の出荷額は小さいので、順位は変わらないと思われる。

第2節 テキスタイル産地としての福井県の地位

次に全国の主要なテキスタイル²⁾産地という観点から福井産地のポジションを出荷額ベースでみてみると(表1-2)、第1位は西陣(京都)で、絹織物

表 1-2 全国主要テキスタイル産地の比較

産地名	主要業種	規模	
		億 m ²	億円
〈長繊維織物産地〉			
福井	長繊維織物	5.6	784（広幅） 214（細幅）
石川	長繊維織物	5.3	
富山	同上	0.8	
栃尾	同上	0.6	277
見附	同上	0.3	147
〈短繊維織物産地〉			
播州	短繊維織物	2.0	
三州	同上（産業資材主体）	1.7	
知多	同上（白生地）	1.6	
三河	同上（インテリア）	1.5	
泉州	同上（細幅主体）	1.3	
大阪南部	同上	1.2	
遠州	同上	0.5	
備後	同上（厚織）	0.4	180
高島	重布・クレープ		150
天龍社	別珍・コール天	0.2	
今治	タオル		
〈毛織物産地〉			
尾西	毛織物	0.8	817
津島	同上	0.3	178
岐阜	同上	0.3	246
尾北	同上	0.2	177
名古屋	同上	0.1	201
〈複合織物産地〉			
桐生	同上		150
富士吉田	同上		94
秩父	同上		96
八王子	同上		37
所沢	同上		32
〈絹織物産地〉			
西陣	絹織物		1,402
丹後	絹織物（白生地）		525
十日町	同上		154

(出所) 各産地組合

(注) 数字は最近時点(概ね平成8~9年)

ただし、北陸と尾州毛織物産地は平成11年

の1402億円、2番目が福井で、長繊維織物の広幅織物で784億円、細幅織物が214億円、合計で998億円となる。しかし、「福井は実はもっと大きい。福井は賃加工が多く、収入は加工賃が主であり、過小評価されている」と指摘されている³⁾。従って、長繊維織物では、福井産地は日本で第1位であると言える。3位が毛織物の尾西産地である。その出荷額は817億円。因みに、毛織物産地としては岐阜246億円、尾北177億円、津島178億円、これらに名古屋を加えた全体を尾州産地と呼んでいる。ここは、毛織物産地としては世界最大級であり、その出荷額は1600億円程度になる。世界の毛織物産地としてはイタリア中部のプラト(Prato)や北部のビエツラ(Biella)などがつとに有名であるが、数量規模では尾州産地が依然として世界最大とみられている。

なお、ここで、主要なテキスタイル産地を概観すると、綿織物、短繊維織物産地としては、播州(兵庫県)が最も大きい。ここはシャツやブラウス等の生地、とくに柄物(先染め、糸染め)の生地の産地として質的に世界一を誇り、輸出額が多い。このほかに、三州(愛知県)は、自動車用向けやヨットのセール、テントなど産業資材用の厚地織物産地として有名である。知多(同県・知多半島)はここは綿の白生地としてかつては非常に大きな産地であった。三河(同県)は、カーテンなどインテリア向け繊維製品の産地である。このように繊維工業出荷額が日本一である愛知県には、毛織物産地と、さまざまな用途に特化した短繊維織物産地が現在も多く存在している。短繊維織物産地としては、今治(愛媛県)が全国最大のタオル産地(第2位は大阪)で、恐らく世界でも最大と思われる。

このほかに、絹織物産地としては、丹後(京都府)は絹織物産地で生産規模は525億円。ここでは白生地を生産し、これを西陣で加工して最終製品の和服になる。十日町(新潟県)も同様の絹の白生地産地である⁴⁾。

さらに、「複合産地」として分類される産地群がある。これは合繊維物や毛織物、綿織物などに特化せず、多様な生地や製品を製造販売している産地

表 1-3 主要業種における福井県のポジション

（単位：％）

1) 織物工業（生産量シェア）

年次	織物合計	合繊長繊維織物	人絹織物	絹織物
昭和 40 (1965)	7.6	37.8	45.4	12.5
50 (1975)	11.4	20.5	35.7	15.5
60 (1985)	11.4	38.6	44.6	15.6
平成 10 (1998)	17.4	42.4	27.9	14.4
11 (1999)	16.6	40.5	29.6	15.1

2) 撚糸・ニット・レース業（設備シェア）

年次	撚糸業	経編ニット	丸編ニット	編レース
昭和 50 (1975)	12.7	17.0	2.9	27.3
60 (1985)	11.2	3.4	3.0	30.6
平成 10 (1998)	…	21.7	…	29.1
11 (1999)	…	21.8	…	30.0

（資料）各産地組合

である。その典型としては、福井県が明治時代に絹織物技術を導入した桐生（群馬県、150億円程度）をはじめ、富士吉田（山梨県）、秩父や所沢（埼玉県）、八王子（東京都）などがあるが、その規模は現状いずれも小さい。しかし、首都圏という巨大な最終消費市場に近接しているという立地上のメリットを生かして、多様な取組みをしている。

ただし、全国ほとんどの産地がダウンサイジングを迫られている事実には変わりはない。要するに、全国に歴史的に展開している織物産地のなかで福井は、長繊維織物を主体に実質的には国内第1の規模を有する繊維王国であるという事実をここで確認しておきたい。

第3節 福井県の主要品目別の全国的なポジション

全国に占める福井県の生産シェアを主要業種別にみると（表1-3）、例えば合繊長繊維織物では昭和40年には全国シェアが37.8%であったが、それが50年には20.5%に低下した。しかし、その後反転して、平成11年には

表1-4 全国に占める福井県繊維産業の地位（平成8年）

業種 / 品目	全国生産シェア (%)	ランキング
織物工業		
アセテート織物	61.6	1位
ポリエステル長繊維織物	45	1位
レーヨン・キュブラ織物	29.7	2位
絹織物	15.5	3位
染色工業	約20	…
うち、合繊長繊維織物染色		1位
ニット工業		…
経編	33.5	1～2位
編レース	34.6	1位
細幅織物	29.0	…
織マーク（設備）	84.0	1位
リボン（同上）	87.8	1位
撚糸	15.4	
仮撚加工糸	24.3	

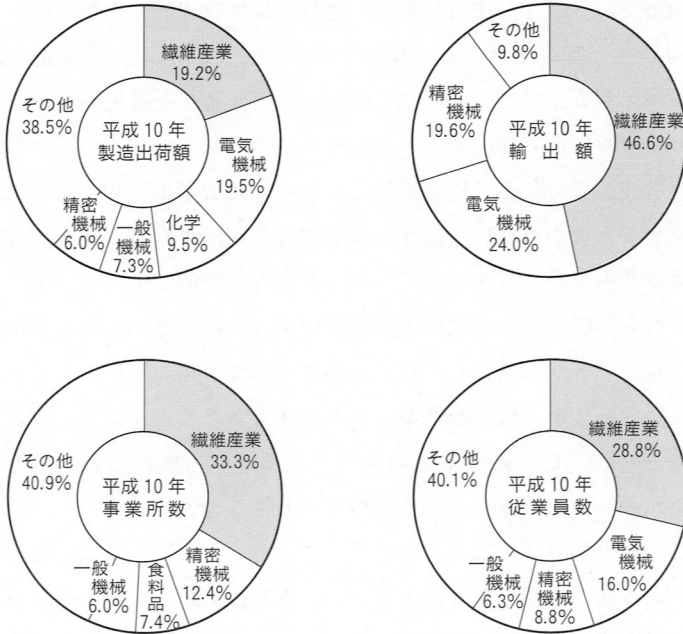
（出所） 福井県『福井県繊維産業21世紀ビジョン』平成11年3月

40.5%になっている。福井県では全国の4割強を占めている。人絹織物（レーヨン織物、キュブラ織物、アセテート織物）についてはこの間に45.4%から29.6%に低下しているが、その分はおおむね石川県が上昇している。また、絹織物も12.5%と日本で第3位である。

撚糸、ニットやレースについては、設備シェアでみて、例えば経編ニットが21.8%、編レースが30.0%などと、織物だけでなく、福井県には長繊維関係の製品はほとんどすべてを供給出来る構造になっている点の特徴である。この点は表1-4でも明らかである。すなわち、主要な業種・製品で福井の全国シェアは大きなものが多い。とくに、細幅織物の織マークやリボンでは全国シェアが8～9割と高い。

福井では川上の合繊から川下のアパレル縫製までが立地していることは既に紹介した。繊維製品の高品質化を図り、また、新製品の開発に際しては、産地内に製造工程の川上から川下まで、そして関連産業が存在することが非常に大きなメリットになることから（この点は後述する）、こうした集積が福

図 1-1 県内における繊維産業のウエイト



（出所） 福井県繊維協会『フクイ繊維協ニュース』2000年8月号

井県の繊維産地の非価格競争力の根源を形成しているという意味で極めて重要な産地構造であると言える。

第 4 節 福井県における繊維産業のウエイト

県における繊維産業のポジションをみると、図 1-1 が示す通り、製造業従業者数 99,900 名のうち、業種別には繊維産業が 28.8% で最大。事業所数でも 33.3%，輸出額では 46.6%，ただし、出荷額では 19.2% である。つまり、平成 10 年で繊維産業（テキスタイルと製品の合計）は県内最大の産業である。このように繊維産業のウエイトの大きい府県は他に見当たらない。ただ、出

荷額では電気機械が19.5%と、繊維工業（テキスタイル工業）の19.2%をようやく上回っている点にも注目したい。電気機械は輸出額でも第2位、従業員数でも同じく16.0%で第2位になっている。つまりトップが繊維で、次いで電気機械である。ただ、出荷額と従業員数のシェアを業種別にみると、繊維産業の生産性は他の業種よりも低いことが明らかとなる。繊維は機械化・電子化が進展しても、とくに縫製業などを中心に労働集約的であり、労働生産性が低いことは否めない。福井県は繊維産業が他の府県に比べて健闘している事実は明白だが、しかし、そこの辺りに別の問題があるといえる。もとより、これらの統計からも機械工業の発展が見て取れるが、生産性の低い繊維産業のウエイトが依然として高く、逆に生産性が高い業種のウエイトが相対的に低いという事実は、福井県の立地条件もさることながら、繊維に傾斜し過ぎたために、他の新興業種の進出・成長が立ち後れたといった点はなかったのかどうか、吟味してみる余地がありそうである。

因みに、岐阜県では中部地方に立地していることもあり、広域での機械工業をはじめ多様な業種の発展があること、また、大垣市に典型的にみられるように地場企業で全国的な企業経営者がかなりの数、輩出している。ところが、福井では、繊維以外には全国企業は乏しいといえる。福井県の立地条件、すなわち、日本海側に面し、平野が比較的少なく、冬季の天候などが、かつては繊維産業の立地にはプラスとなっていたものの、それが経済全体の発展に必ずしも積極的要因にはなっていないとみることも出来るかもしれない。

繰り返しになるが、福井県内には平成10年現在で繊維全体で2600を超える事業所が存在し、2万9000人弱の従業員を擁し、そして3800億円余りの出荷額があり、年間900億円以上を輸出している。これを支えているのが、川上では、敦賀市の東洋紡と鯖江市のカネボウという最大手繊維両社の合織工場、福井市の福井紡績など。川中では、1200軒を超える織布工場、そして福井市のセーレン、サカイオーベックス、カンボウプラスなど大手染色加

工企業（これらの企業は石川県の小松精練などとともに、合成繊維の染色加工では世界トップクラス）、そのほか多数の撚糸、仮撚り加工糸、サイジング、経編、丸編、レース、そして縫製といった企業が集積して、有機的な分業を行い、わが国最大級の繊維産地を形成している⁵⁾。この集積が、これまでは新製品開発を容易にし、また、福井では、どのような製品でも製造・供給が出来るという、アパレル企業やデザイナーはもとより、産業用ユーザーからも頼られる生産基地となっている要因である。

〔注〕

- 1) 本稿では、「繊維工業」は紡績・撚糸・織布・ニット・染色加工などの原料・中間素材段階を言い、アパレル（衣料）などの繊維製品は含めない。これらを含める場合は「繊維産業」とする。なお、繊維産業は素材、製品形態、用途が多岐にわたり、しかも川上の糸からアパレルなどの最終製品までの製造流通チャンネルが長く複雑なこともあって、その使用される用語は必ずしも統一されておらず、立場により、業種により、その用法は様々である。
- 2) 本稿では、テキスタイル (textile) は、糸や生地（織物およびニット生地）の総称として使用するが、業界では繊維全般を意味する場合にも使用されることも多い。なお、ファイバー (fibre) とは、狭義の繊維（綿花、羊毛、麻など）であり、化学繊維の短繊維と長繊維を意味することも多い。
- 3) 例えば、業界専門家である福井県繊維協会・小山英之調査部長の指摘。
- 4) このほかに、絹織物産地は現在も全国に点在している。農畜産業振興事業団の調査によると、その数は東北から沖縄まで 40 を超えている。なお、経済産業省・中小企業庁の定期調査『全国の産地』によると、全国のテキスタイル産地（年商 5 億円以上、平成 11 年度）は 126 である。
- 5) 統計は県という行政区分で集計されているが、実際の繊維取引には県という境はほとんどない。現実のビジネスは、広く北陸、そして関西や中部、さらには世界と展開していることは言うまでもない。

第2章 福井県繊維産業の歴史

第1節 明治期から戦前期

福井は既に江戸時代に絹織物の生産地として有名であった。周知のように絹織物は千数百年前に中国から朝鮮半島を経て、日本にもたらされたといわれている。福井でも、古い時代から作られていた事実は、考古学研究でも明らかになっている。ただ、近代産業としての繊維産業が起きたのは、明治20年代に群馬県の桐生産地（当時の先進的繊維産地）から技術を導入して、絹織物/羽二重の生産を開始してからのことである（表2-1参照）。当時の福井や勝山では、中クラスの地主が絹織物生産に取り組んだといわれている。

大正時代になると、第一次世界大戦とともに絹織物の輸出が増大した。わが国の工業化は進展したとはいえ、当時の国内需要は自ずと限られており、内需充足もさることながら、輸出をして貴重な外貨を稼ぎ、さらなる工業化と軍備拡張に資金を回していたことは公知のところである。この当時、輸出は満韓支向けがほとんどを占めていた。そして、この大正時代には農家による「賃織り」（糸を渡して織物に織らせて、織り賃を支払う）が開始された。

さらに、昭和の戦前期になると、レーヨンが開発された。レーヨン（人造絹糸）が英国から三井物産の英国駐在員を通じてわが国に紹介され、これに着目した帝人（当時の帝国人造絹糸）や東レ（当時の東洋レーヨン）などによって工業化された。そして、福井でもレーヨン織物が製造されるようになったが、その基盤は絹織物の一大産地であったことは多言を要しない。そして、生産は順調に伸びて、やがて福井県は「人絹織物王国」と呼ばれるに至った。因みに、昭和12年には全国シェアの60%を福井県が占めることになった（平成12年現在でも、合繊長繊維織物では福井県では全国の40%を占めている）。当

表 2-1 福井県の繊維産業の歴史

年 次	記 事
江戸時代	絹織物で全国的に名声
明治 20 年代	群馬県桐生から技術導入し（20 年）、羽二重産地を形成
大正時代	第 1 次世界大戦と絹織物輸出増大 機業場、商社の委託生産方式
昭和・戦前期	絹織物から人絹織物へ多角化、「人絹織物王国」 全国シェアが 60%（12 年） 企業数 2900、織機 9 万台、生産量 5.6 億 m ² （15 年） 戦争突入で企業整備
20 年代	戦災、敗戦（20 年） 福井大震災（23 年） 朝鮮戦争特需（25 年） 原糸メーカー、商社の系列生産始まる（27 年） → プロダクションチーム（PT）
30 年代	人絹織物から合繊織物（ナイロン、ポリエステル）へ転換
40 年代	「ポリエステル加工糸織物」の開発 織機 8.9 万台、生産量 7.6 億 m ² で世界一の長繊維織物産地 (40 年代末)
50 年代	石油ショックと韓国・台湾繊維業界の急発展 高付加価値化と量産定番織物の二極分化論 「減量加工」によるジョーゼット、デシンなど
60 年代	円高による輸出減 「新合繊」の開発
平成～	織物生産 9.2 億 m ² で史上最高（4 年）、以後の産地規模縮小へ 「複合織物」、高感性・高機能性衣料用織物と非衣料用織物の開発 戦後 11 回目の不況（9 年より現在まで）、非衣料用途への転換

（資料） 福井県繊維協会『フクイ織協ニュース』（月刊）、同『五十年史』（平成 12 年 11 月）、上田誠『織物ふくい戦後史』（昭和 60 年 10 月）他。

時は企業数が 2900、織機は 9 万台と織機の台数は現在より多い。生産量は 5.6 億 m² で、これは今の生産量とあまり変わらない。

その後、日中戦争、そして第二次世界大戦に突入し、主要な繊維工場は軍需工場に転換させられた。

第2節 敗戦後から平成期

福井は、戦災（昭和20年）と大震災（同23年）で大変な被害を重ねて受けたが、しかし、朝鮮戦争特需で日本製品に対するアメリカ軍の需要が増え、織物をはじめ繊維製品も間接的にも直接的にも特需の恩恵を受けて、繊維産業は大きく復興した。その後のベトナム戦争でも特需関連で大きく伸びた。

昭和27年は福井県のみならずわが国織物産業の歴史では画期的な年となった。後に「プロダクションチーム」（PTと業界では略称）と称された取引、すなわち、原糸メーカー（東レや帝人などの合繊メーカー）が直接機屋に織布を依頼したのがこの年であった¹⁾。それまでは、大きな機屋が小さいところに、あるいは地元の問屋が地域の機屋に賃織りをさせていたのが、この昭和27年に合繊メーカーが直接賃織りに出す、さらには、伊藤忠商事や丸紅などの総合商社などによるこの系列生産がこれ以降始まった（もともと、近年は繊維生産機能の海外シフトと輸入品増大で、このいわゆるPTも次第に崩壊しつつある）。

昭和30年代になると、木材パルプのセルロースを原料とする人絹織物から、石炭・石油を出発原料とする合成繊維織物への転換が始まり、福井産地はさらに発展・進化していく。

昭和40年代には福井は世界一の合繊長繊維織物産地となった。昭和50年代に入ると、革新織機のウオーター・ジェット・ルーム（シャトルの無い、水噴射式織機）の導入がいち早く進展したこともあって、1970年代の半ばには、アジアの合繊長繊維織物生産量の7割強はわが国であった（表2-2）。その後、2度のオイルショックがあって世界的に経済が混乱し、輸出も急減した。しかし、中東産油国の石油収入が急増したことから、同地域向けの織物輸出が幸いにも順調に伸びて、福井にも好景気が戻り、産地も大きく拡大した。この間、過剰織機の買上げ・廃棄（例えば、昭和63年には1万3000台余りがその対象になった）や、海外見本市の開催など県を挙げての織物業界の支援

表 2-2 東アジア主要国・地域の合織長繊維織物生産
(億 m²)

年次	日 本	韓 国	台 湾	中 国	以上合計
1975	12.7 (71.3)	3.3	1.8	—	17.8
90	16.1 (21.0)	25.0	24.0	11.5	76.7
93	14.9 (14.4)	36.7	29.9	22.0	103.5
95	13.7 (11.1)	47.9	33.8	28.4	123.8
96	13.6 (10.8)	49.9	31.4	31.1	126.0
97	14.2 (10.7)	48.8	33.3	36.5	132.8
98	11.9 (9.2)	43.9	33.8	40.1	129.7

(出所) 福井県繊維協会調査部

(注) 1. 中国はレピア織機による生産が不明のため含まない。

2. ()内は合計に対する比率 (%)

が実行されたことも大きく影響した。

一方、この頃から台湾・韓国の合織産業が急速に発展し、昭和50年代に入ると、東アジアに加えて、タイやインドネシアなどの東南アジアの繊維産業も成長し、日本製品と価格的に競合する状況になった。こうした局面を開いたのが「減量加工」²⁾によるジョーゼット、デシンなどの新品種織物の生産であった。

昭和60年代になると、円高になり(1ドル120円程度)、これにより、輸出は価格で勝負する分野ではますます困難になってきた。他方、輸入も糸を中心に急増した。こうしたなかで、1980年代の終わりに、北陸で「新合織」³⁾が開発された。これを開発するためには、産地に蓄積されていた織物の技術、染色加工の技術が活用され、特に染色加工については石川県の小松精練(合織の染色加工では世界最高の企業)が、一時は全国の5割から7割くらいの新合織の加工を行っていた。しかし、次第にこの技術も産地に広く普及し、今では、国内では一定レベル以上の企業であれば可能になっており、つれて「新合織」も一般的な商品になっている。

その後平成になるとバブル景気でもあり、福井県の織物生産量も同4年には9.2億 m²と、史上最高の昭和59年の9.6億 m²に近い水準を記録した。

しかし、これをピークとして以降、生産の規模は年々縮小し、平成11年には4.9億 m^2 とここ7年間でほぼ半減する状況となっている。

もとより、この間も「複合織物」ないしは「新複合織物」などと、合織メーカー、商社、産地企業が新規製品の開発に努めたものの、これらはいずれも「新合織」の二番煎じ的な商品に止まり、人気製品にならないまま現在に至っている。そして、産地は、平成9年から戦後第11回目の不況に入ったまま回復のめどが立たない厳しい業況が続いている。それでも、福井はレーヨンや合織の長繊維織物分野では世界一の技術を誇っていることには変わりはない。

第3節 福井とアジアの長繊維織布業の 雁行形態的發展

この福井の長繊維織物産業の歴史を新製品開発という観点からアジアとの比較でみると、非常に興味深い動向がうかがわれる⁴⁾。すなわち、日本で開発された技術とそれに基づく製品がその後、韓国・台湾・中国に次第に移転していく。前述のように明治の福井産地は羽二重で発展した。次いで絹の縮緬、昭和戦前期になると人絹織物、朱子・タフタとなる。そして戦後は、次のような画期的な展開をみたのである。

- ① 昭和20年の戦災と同23年の震災から立ち直るや否や人絹変わり織・フジェットが開発された。時代の変遷にともなって新製品が相次いで開発され、これが福井産地発展の原動力になった。
- ② 昭和30年代にはナイロンタフタ⁵⁾が出現、次にポリエステルタフタが登場する。
- ③ 昭和40年代になると、ポリエステル加工糸織物⁶⁾が出現した。この製品は当時一世を風靡し、日本国中のコート類はすべて加工糸織物製となる程であった。

- ④ 昭和 50 年代には、ポリエステルジョーゼット、ポリエステルの撚糸織物、そしてスパンライク織物が登場した。スパンライクとは、長繊維織物はプラスチックのような光沢があるが、短繊維を紡績した糸はそうした艶がなくふっくらとした感触である、長繊維ないし同織物に特殊な加工をすることで同様な感触を出した商品である。
- ⑤ 昭和 60 年代には、62 年に、先に述べた「新合織」が登場。その後、新新合織織物、複合織物、そして新複合織物へと高付加価値を志向した製品開発が行われてきている（しかしながら、いずれも大きな成果は上がっていない）。

このように福井産地は、明治以来新製品を開発して、これを国内で販売し、さらに輸出することで大きく発展を遂げ、わが国の長繊維織物工業を常にリードしてきている。まさに「挑戦と転換の 100 年」であったと言える。

そこで、本題の福井、そして広く北陸で開発されたこの種の技術が韓国・台湾・タイ・インドネシアなどにどのように雁行形態的に移転したかということだが、表 2-3 の示すように例えば福井で昭和 30 年頃に作られていたナイロンタフタは、20 年後の昭和 50 年代になって、韓国・台湾で作られるようになる。現在では、ナイロンタフタは台湾が一番競争力の強い産地である。そして、新合織織物や新複合織物については、類似品の「モドキ」は出来ているが、韓国・台湾では生産出来ていない。つまり、日本で企業化されて 10 年から 20 年経ったものが韓国や台湾、そしてインドネシア等に伝わっていった。従って、日本は合織長繊維織物業において不断に最先端を走って新技術や新製品を開発し、新しいマーケットを開拓してきている。ただし、こうした技術力は必ずしも福井だけでできるものではない。繰り返しになるが、合織メーカーの長繊維糸を開発・製造する力、福井を中心とした北陸地域にある新しい糸を撚糸する能力、これを織布する能力、染色して加工するキャパシティ、これらが全て揃わないと、しかも各段階間の連携がないと、こうした技術は生まれえないという点が重要で、それが広くわが国繊維工業の

表 2-3 福井とアジアの織布技術の雁行形態的發展

区 分	福井産地	韓 国	台 湾	インドネシア
平 成	新複合織物	新合繊モドキ	新合繊モドキ	新合繊モドキ
S 62年	新合繊織物			P 緯撚糸織物
	新合繊モドキ	P 緯撚糸織物	P 緯撚糸織物	P ジョーゼット
S 50年	スパンライク織			N タフタ
	P 緯撚糸織物	P ジョーゼット	P 加工糸織物	
S 40年	P ジョーゼット	N タフタ	N タフタ	
S 30年	P 加工糸織物	絹絞り・縮緬	絹縮緬	
	P・Nドビー機			
	P タフタ			
終 戦 後	N タフタ			
	人絹変わり織・フ ジエット			
昭和戦前	人絹朱子・タフタ			
大 正	絹縮緬			
明 治	羽二重			

(出所) 福井県織維協会

(注) N：ナイロン，P：ポリエステル

非価格競争力の源泉になっている。そういう意味で今日も福井、そして北陸産地は世界最大の技術力、技術開発力を保持しているといえる。

なお、問題点についてみると（この点にかんしては、詳しく後述する）、表 2-3 の平成期の「新複合織物」はほとんどブームとはならず終わっている。過去がそうであったように、この先新しい大型製品が開発できれば、それを起爆剤にして産地は再び発展できることになる。因みに、昭和 40 年代のポリエステル加工糸織物、50 年代のポリエステルジョーゼットやデシン、60 年代末から平成初期の新合繊という起爆剤があった。

しかし、これからは何があるかという、こういう大型の一世を風靡するような商品は最早登場しないのではないか。また合繊メーカーもこれ以上新しい大型のファイバーを開発する可能性も能力もないのではないか⁷⁾、と一

般にはみられている。そうであれば、いずれは韓国・台湾・インドネシア・タイ、そして中国の技術が追いついてくることになる。事実、例えば福井の織布企業の元技術者あるいは廃業した機屋の技術者が東アジア、東南アジアに出向いて技術の指導をしている例は極めて多いことから明らかである。すなわち、技術はいずれ移転される。繊維機械も日本から輸出されている。そしてこれらの国・地域で製造された製品がわが国に輸入されている。このような状況下において、福井では従来のアパレル用途主体から非衣料用、すなわち、産業資材用途への展開を図ってはいるが、こうした方向を含めて福井のみならず、全国の繊維産地、そしてわが国の繊維産業はどうしたら生き残れるのか、これが現在直面している最大の課題である。

〔注〕

- 1) 化繊メーカーによる賃織生産（ないしは系列生産）は、福井県大野織物工業協同組合が旭化成工業のキュブラ（商標名「ベンベルグ」）で行ったのが最初である（福井県繊維協会『五十年史』平成12年11月，p.29）。
- 2) 「減量加工」とは、カセイソーダで織物を多少溶かして繊維を薄くしたり、柔らかくしたりする方法。北陸にはもともと絹織物でこの加工技術があったが、これをポリエステル長繊維織物に^{ごしほそ}応用することで、爆発的な需要を喚起した。
- 3) 「新合繊」とは、非常に極細のポリエステル長繊維糸を使って主として衣料織物用の、例えば薔薇の花びらのような感触、風合いの織物である。その優れた細やかな質感がブームを呼んだ。なお、新合繊の開発の経緯とその商品化については、拙稿「企業の新製品開発とマーケティング——わが国合繊企業による衣料用高機能合繊のケーススタディ」（『岩手県立宮古短期大学紀要』第1号，1990年3月）に詳しい。
- 4) 雁行形態的發展は、言うまでもなく、国についても、業種についても妥当する。因みに、電子工業製品については表2-4の学会報告資料がある。
- 5) タフタは、無地の平織りで、スーツなどの裏地や傘地など、ナイロンタフタはスキーウェアなどに使われる。
- 6) 加工糸は化繊長繊維糸を撚糸し、熱加工などを施して嵩高い風合いを出した糸。これを用いた織物を加工糸織物という。
- 7) 最近、世界最大の合繊メーカーでもある米国デュポンは、遺伝子組み替え技術を活用して、クモの糸に類似した人造繊維の開発を発表している。この新素材は「ス

表 2-4 電子工業製品のアジアでの雁行形態の発展

国・地域	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	将 来
中 国			白黒TV ラ ジ オ テーブ レコーダー	カラーTV CDプレーヤー ステレオ 冷蔵庫 洗濯機 エアコン	IT 関連製品
ASEAN			カラーTV 冷蔵庫 洗濯機 エアコン	V T R	
NIEs		ラ ジ オ テーブ レコーダー 冷蔵庫 洗濯機	カラーTV V T R エアコン 部 品 (下請)	半 導 体 L C D	
日 本	白黒TV ラ ジ オ テーブ レコーダー	カラーTV ステレオ 冷蔵庫 洗濯機 エアコン	V T R CDプレーヤー 半 導 体	携帯電話 (モバ イル) パソコン L C D	

(出所) 五味紀男 (松下電器産業) 「エレクトロニクス産業における棲み分けと競争—— 21世紀に向けた日本、NIEs、ASEAN、中国——」 (2000年11月11日の産業学会東部地方部会での研究報告の資料から)

パイダーシルク」と呼ばれている。トウモロコシなどを原料とするライフサイエンスを利用した新規繊維の開発が注目されている (平成 12 年 3 月 31 日付『朝日新聞』ほか)。しかし、この種のファイバーが既存のナイロン、ポリエステル繊維、アクリル繊維などに匹敵できる大型繊維になるかどうかは未知数である。

〔参考文献〕

- 福井県繊維協会『フクイ繊維ニュース』(月刊)
- 福井県絹織物同業組合『福井県繊維産業史』(昭和 46 年)
- 福井県繊維協会『三十年史』(昭和 55 年)
- 同『40年のあゆみ』(平成 2 年)
- 同『五十年史』(平成 12 年 11 月)
- 上田 誠『織物ふくい戦後史』(昭和 60 年 10 月)

黒木敏雄「北陸産地の歩んだ道——化合織メーカーとの50年——」（『化織月報』別冊「日本の化学繊維産業/道を拓いて50年、そして21世紀へ」1998年9月）

木村 亮（福井大学助教授）『福井繊維産業論 講義録2』（福井県立大学・平成11年度寄付講義「福井繊維産業論」講義録）

* このほかに、日本合成繊維新聞社から1988年以降毎年、北陸関係出版物が刊行されている。最新刊は『北陸産地・脱皮への苦悩——99年の軌跡と21世紀への模索』（2000年）